

「一人ひとりに合った学び実践校（仮称）」検討会議（第2回）：資料1

個人と社会の
ウェルビーイングの
実現

「一人ひとりに合った学び実践校（仮称）」 第2回会議資料

2024年9月4日（水）
長野県教育委員会事務局

第1回会議（6/18）のおさらい

【県の考え】

- ✓ 「すべての子どもが、一人ひとりに合った学びを自ら選択できる状態」を目指す実践校（仮称）を、地域と共に創りたい。
- ✓ 地域の独自性、学校・教員の裁量性の高さという本県の特徴を鑑み、全域一律ではなくパイロット校&地域の実践から、他地域に広げたい。
- ✓ 上記を踏まえた実践校の要件イメージと県の支援イメージ（ともに素案）を提示。

論点1：（理想像のイメージ）「一人ひとりに合った学び」が実現する学校とは？
論点2：（進め方）「一人ひとりに合った学び実践校」をどう創っていけばよいか？
について議論し、主に以下の意見をいただいた。

【主なご意見】

実践校の理想像について

- 子どもたちの前に世界を用意してあげることが必要
- 学びを通して、自己肯定感が高まっている
- 既存の選択肢から選ぶだけでなく、時には新たな選択肢を自分で創出し、新たな可能性を拡げていける
- 現実との連続性のある学びができています

重要な視点

- 関わる全ての人のウェルビーイングに資すること
- 個別最適な学びと協働的な学びは両輪であること
- 子どもをいかに外の世界(地域等)とつなげていけるか
- 学校だけでなく、地域、市町村教委、教員の思いもきちんと組み入れることが大事

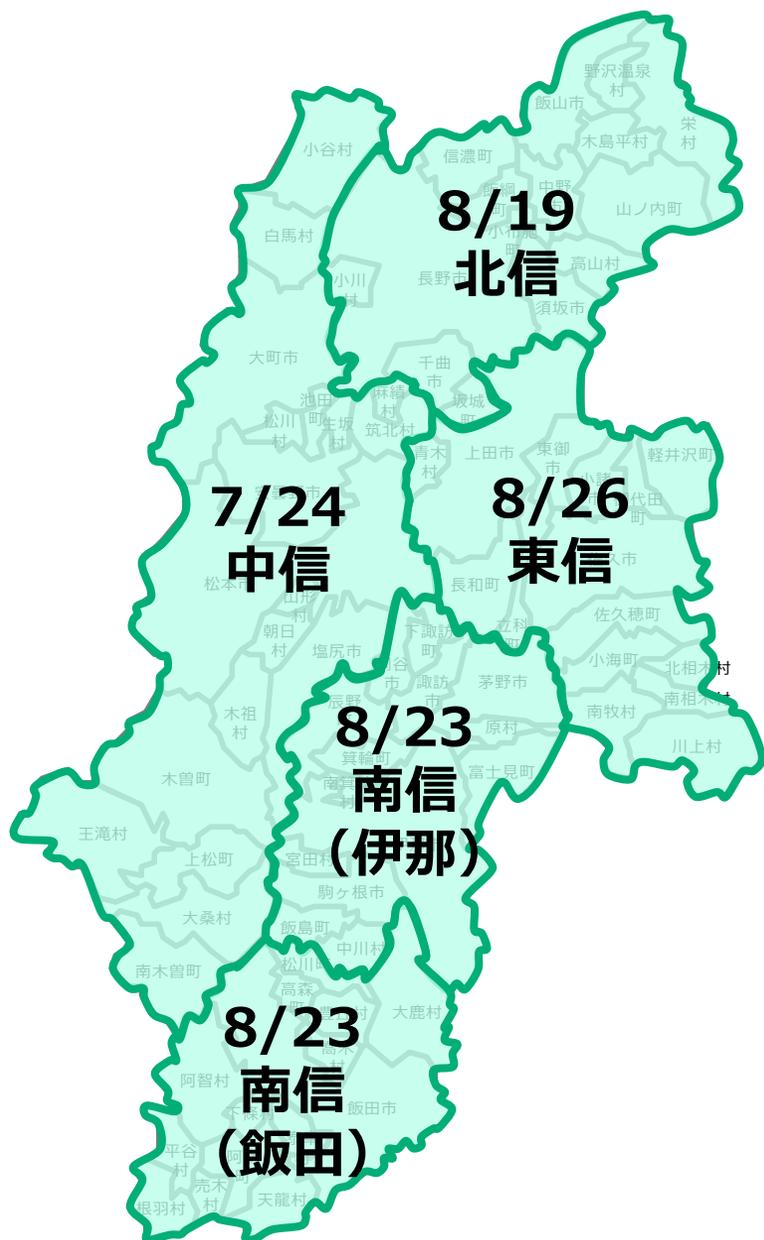
打ち出し方・取り組み方

- 理念は、抽象的であるべき
(特定手法に寄らぬよう、手段が目的化しないよう)
- 目指すべき方向性は、県が旗を掲げるべき
- 具体の手法は、地域の自主性に任せるべき
- これまでの県内各地域の実践から具体例を学ぶべき
- ネーミングが個別最適に寄りすぎ、誤解を生む

実践校の展開方法と県の支援

- 同じような方向感を持った学校同士が繋がり、知見を学び合ったり励まし合えるような仕組みがあるとよい
- 学校ではなく、地域が実践校に手を挙げるというパターンがあってもよい
- 県には、各地域の取組に対して意味付けを行うことで実践者を励ましつつ、伴走支援できるようなコンサル力が求められる

【7～8月の動き】県内各市町村教委との意見交換（1）



県内5地域（東信、南信(伊那)、南信(飯田)、中信、北信）で実施した「県と市町村教委との懇談会」で、実践校についても意見交換を行った。

多くの市町村教委から「興味深い取組」「やってみたいと思えた」等の好意的な意見を頂いた一方で、小中学校設置者としてのリアルな課題や疑問も多くいただいた。

例えば、我が町には「信州やまほいく」で自然に浸りこむ素晴らしい学びをやっている幼稚園・保育園があるが、小1になった途端、みんな教室で授業を聞いている。こういうのを変える契機になれば。

各地域では、これまでも子どもの姿・事実に基づき進めてきた。各地域にそれぞれの事情や経緯があるので、1つのモデルに基づいて進める類のものではない（なので各地域から提案できる形式がよいと思う）

学びの改革パイオニア校構築支援事業（県の実証事業）で実践してきたが、それをさらにグレードアップさせる取組であり、ワクワクして話を聞いていた

【7～8月の動き】県内各市町村教委との意見交換（2）

【現状制度との整合に関すること】

通学区制度はどう調整するのか？

（行きたい人がいても、学区により行けないということが発生した場合、どう対処する？）

今の学習指導要領との整合性は？

（学習指導要領を超えないのか。硬直している）

【地域・現場の現状と本取組とのギャップに関すること】

この取組を実践校以外にも拡げていくための方策はあるのか？

今までの取組の良かったところも忘れないでほしい

ウェルビーイング等の理念だけでは、明日の授業に活かせない

（せっかく頑張ってきたのにコロナで元の一斉一律に戻った印象。現場は疲弊。新しいことに抵抗。事実を見せる方法で、現場に丁寧に納得感を与える取組を）

【リソース（特に人）に関すること】

何校くらい指定されるのか？

（どこも人不足。本当に加配がつくのか？ 限りがあるのでは？）

加配の期間はどのくらいを想定しているのか？（2年くらいで去られてしまっては定着しないのでは？）

現在、別の用途で加配を頂き助かっているが、それが削られてしまう可能性はあるのか？

相応の能力のある人物を配置してほしい（そのために校長会等とも連携する必要がある）

成果が上がったら加配が切られるようなことはしないでほしい（定着しないことの懸念）

結局、一番難しいのは人事

【7～8月の動き】信州学び円卓会議の宣言を受けた知事・教育長の決意表明

子どもたちにとって最適な学びのあり方を検討し、関係主体の取組や県民全体の機運醸成につなげるため、教育に関わる様々な立場の方が集まり議論を進めてきた「信州学び円卓会議（事務局：知事部局）」が、これまでの議論を踏まえたメッセージを発表。これを受け、**県知事・県教育長の連名により決意表明を行った。**

重点取組項目	信州学び円卓会議
1 子どもたちが学校等でやりたいことを支える	
2 教員が学校等でチャレンジしたいことを支える	
3 一人ひとりの学びや得意を共に認め合う仕組みを検討する	
4 長野県の中山間地域の強みを活かした特色ある学びを広げる	
5 「こどもまんなか社会」の実現に向けた様々な機関の連携・協働を進める	
6 多様な学びの場を信州全体で支えるネットワークを再構築する	

学び・教育改革に臨む私たちの決意
～日本の学びの「新しい当たり前」を信州から創る～

長野県知事 阿部 守一
長野県教育長 武田 育夫

- 長野県の学び・教育をこのように改革していきます
 - 子どもたちが学校等でやりたいことを支える
 - 教員が学校等でチャレンジしたいことを支える
 - 一人ひとりの学びや得意を共に認め合う仕組みを検討する
 - 長野県の中山間地域の強みを活かした特色ある学びを広げる
 - 「こどもまんなか社会」の実現に向けた様々な機関の連携・協働を進める
 - 多様な学びの場を信州全体で支えるネットワークを再構築する
- このような「力」をそなえた人を育成していきます
 - 他者と協力してよりよく生き、自分と他者を幸福にする「力」
 - 物事の本質を捉え自ら主体的に判断する地球市民として生きる「力」
 - 自らの人生を切り拓くための豊かな体験と基礎的な学「力」
- このように改革を推進していきます
 - 市町村、市町村教育委員会、学校長、教員、PTAなど、子どもの学びに関わる教育関係者と改革の方向性を共有する。
 - それぞれの立場で「新しい当たり前」は何か、その実現に向けてどのような取組ができるか検討いただき、共に改革を推進していく。

円卓会議からのメッセージを受け、未来の子どもたちのため、長野県から学びに関する「これまでの当たり前」をもう一度問い直し、子どもたちが主人公の「新しい当たり前」を創っていく。



2024.7.30（火）県庁3階会見場で行われた共同記者会見の様子

【参考】信州学び円卓会議構成員（敬称略）
 信州大学教職支援センター准教授 荒井英治郎（座長）、
 軽井沢風越学園校長 岩瀬直樹、
 松本大学教育学部教職支援室専門員 浦野憲一郎、
 根羽村長 大久保憲一、(公社)信濃教育会会長 大日方貞一、
 (学)白馬インターナショナルスクール代表理事 草本朋子、
 長野県市町村教育委員会連絡協議会会長・長野市教育長職務代理者 近藤守、NPO法人Hug代表 篠田阿依、
 山ノ内町教育長 竹内延彦、上田市立第五中学校校長 畠山正幸、
 須坂市長 三木正夫、松本市立波田小学校校長 三輪千子、
 信州大学教育学部学部長 村松浩幸、
 長野県野沢北高等学校校長 柳沢敬

ここまでの、第1回議論及び関連の動きを整理すると

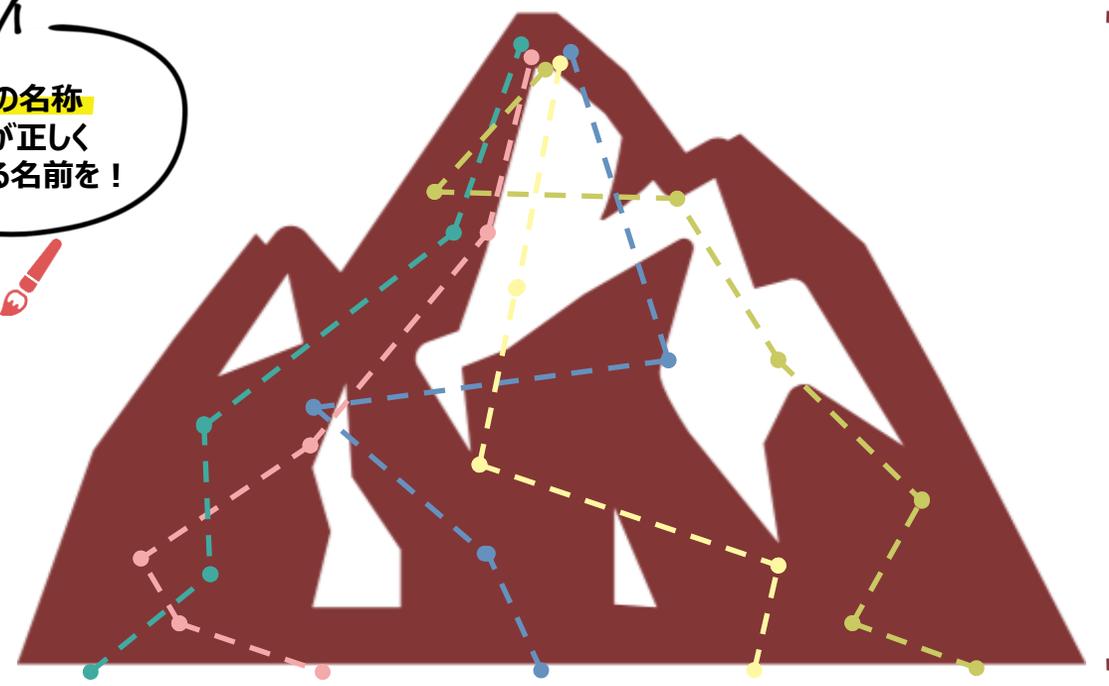
実践校の取組を、登山に例えると・・・

第1回会議での議論や、円卓会議での決意表明等を踏まえて、山頂を定義する必要か

① 目指すもの (ゴール)

✓どの地域でも不変のものとして、県が旗を掲げるべき

④ 山の名称
願いが正しく
伝わる名前を!



② 進め方 (ルート)

- ✓地域に任せるべき
- ✓教員、地域、教委の思いが乗るように
- ✓実践から具体例を学んだ方がよい



学校や地域が、特性やこれまでの取組等を踏まえながら、山頂に向かってどのルートに登るのかをイメージできるようにする必要か

登山者の配置、登山中の伴走支援、次の登山者を生み出す仕掛け、あたりが必要か



③ 県の支援 (装備)

- ✓取り組む人が自信を持って進められるように (勇気づけ)
- ✓取り組む学校同士が繋がれるように (仲間が必要)

以上を踏まえ、改めて事務局にて
以下の観点で（案）をまとめました。

- ① 目指す学校像
- ② 進め方（要件）
- ③ 県の支援の在り方
- ④ ネーミングの考え方

【事務局（案）】①実践校が目指す学校像

- ✓ 変化の激しい時代の今、一人ひとりが自分の個性や可能性を認識でき、多様な他者を尊重し、共に協働しながら、持続可能な社会を創っていくことが求められている。（個人と社会のウェルビーイングの実現）
- ✓ これの実現のため、教育や学びのあり方の転換が求められている。学校においては、常に子どもを主語とし、子どもを信じ、子どもに教えるだけでなく子どもからも学び、子どもの視点で考えられるような学校に変革していく必要がある。
- ✓ これには、学び・授業の変革だけでなく、学校のシステム（仕組み）そのものの変革にまで踏み込む必要があり、単独の学校・地域で進めることは容易ではない。一方で、豊かな自然や豊富な文化資源を活かし、常に子どもの事実心に心を寄せ、学びに真摯に向き合ってきた「信州教育」には、学校の変革のヒントが詰まっていると認識。
- ✓ 難しさも可能性も現場にあるのであれば、その現場に最大限フォーカスすべき。これまで培われてきた信州教育を活かしながら、今の時代に合った学校の仕組みにアップデートしていく現場の実践を進めたい。

常に子どもを主語とし、「好き」や「楽しい」、「なぜ」を追求するために、
子どもが自ら選択でき、子どもが自己実現できる学校
～これを実現するため、学校の仕組みの変革にチャレンジ～

①目指す
学校像

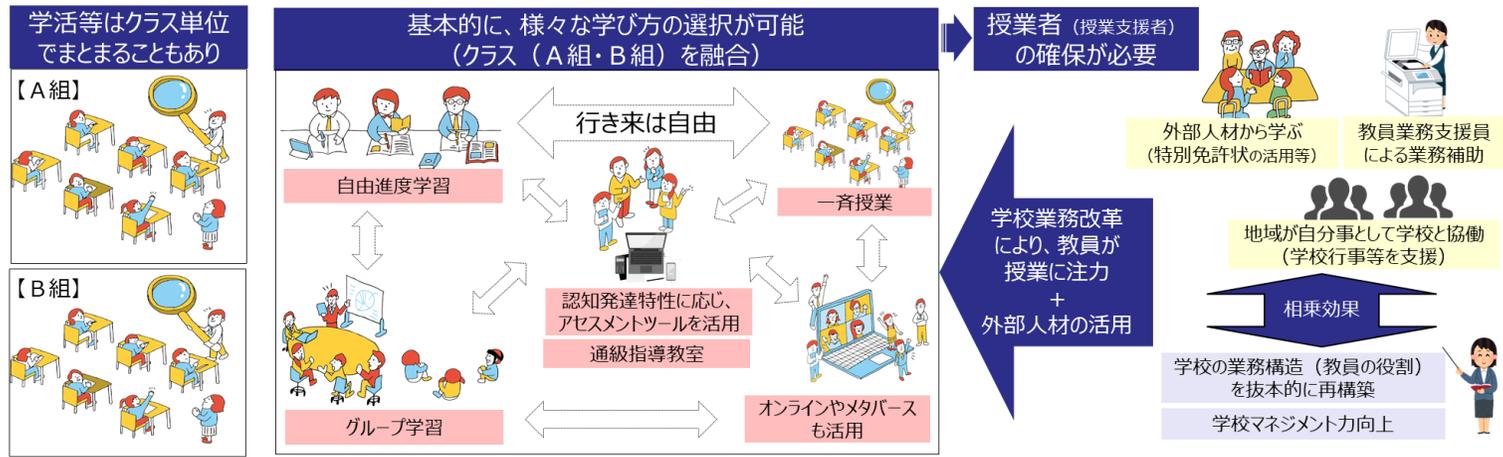
学校像の補足（当初案からどうブラッシュアップしているのか）

「すべての子どもが、「好き」や「楽しい」、「なぜ」とことん追求するための一人ひとりに合った学びを自ら選択できる状態」
実現するため、当初案に加えどんなエッセンスが必要なのか、考えました。

出典：長野県令和6年度当初予算案における主要施策「新時代創造プロジェクト」より抜粋

「一人ひとりに合った学び実践校」で実現したい姿（イメージ）

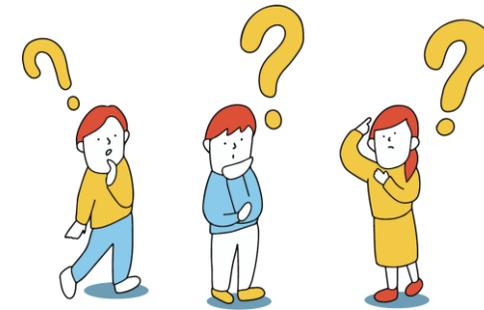
すべての子どもが、「好き」や「楽しい」、「なぜ」とことん追求するための一人ひとりに合った学びを自ら選択できる状態



「個別最適な学び」×「協働的な学び」×「リアル（対面授業）」×「最新のICT」×「+α」のベストミックス校

① 選択の対象を拡げました

当初の例示では「学びのやり方」にフォーカスしていましたが、学校生活に存在する様々な仕来りやルールも含めた「学校のやり方」も、子どもたちが自ら選択・決定できることが望ましいのでは、と考えました。



例えば

- ・学校のルールを子どもが決める
- ・ウェルビーイングな時間割を子どもが決める

等

② 教員の役割

目指す学校像を実践するためには、子どもを信じ、子どもに教えるだけでなく子どもからも学び、子どもの視点で考えられるような教員である必要があり、それに伴い教員の役割が従来のTeacherだけでなく、CoacherやFacilitatorにも広がっていく必要がある、と考えました。

【事務局（案）】②実践校の進め方（要件）

- ✓ これまで県教委や市町村教委では、主に「授業（学び）の改革」「環境・ツール最大活用」「子どもへの対応」「学校の仕組み改革」の切り口から実証研究事業を実施してきている。（次頁参照）
- ✓ これらの取組は、各学校が自校の学びの変革に向けた足掛かりになっており、学校ごと試行錯誤しながら手ごたえをつかみ、誠実に経緯（ストーリー）が紡がれてきている。この「最近の経緯」も、歴史的に紡がれてきた信州教育と同様に、大事にしたい。
- ✓ 一方で、ここ最近の取組は、一定の目的に向かって一定の手法を試し、それがどう作用したかを検証する取組であり、変革のための1つ手前のフェーズであるとも言える。
- ✓ 本取組は、先人が培った信州教育から理念を学びつつ、最近の実証の取組から様々な手法を学び、それらを織り交ぜ、学習指導要領等の今あるルールと今あるリソースの中でできる最大限の範囲で、学校の仕組みを変革することで、子ども主体の学校にアップデートするフェーズである。

- A) 「学校の仕組み変革」に属する取組は、必ず行う
- B) R7年度の学校準備段階から、必ず地域と子どもを話し合いに加える
- C) これまでの経緯や地域の特色を踏まえ、目指す学校像へのアプローチを提案する
- D) 実施プロセスと成果をまとめ、学校公開やwebサイト等を通じて広く共有する
- E) 学校公開は必ず行い、その際の案内役は、教員ではなく地域や子どもが担うこととする

②進め方
（要件）

「学校の仕組み変革」に属する取組の例示について（これまでの実証事業から）

【学校の仕組み変革】

- # 子どもたち自身が学校のルールを作る
- # 異年齢での学級、学習の実践
- # チーム担任制等の体制変革
- # 時間割・宿題・テスト・通知表等の在り方変革
- # 校務精選等の働き方改革
- # 特例校制度の活用
（教育課程特例校、授業時数特例校）

【子どもへの対応】

- # 多様な子ども（多才な子ども、不登校の子ども等）への学び提供
- # アセスメントの活用による児童生徒理解

【学び・授業の改革】

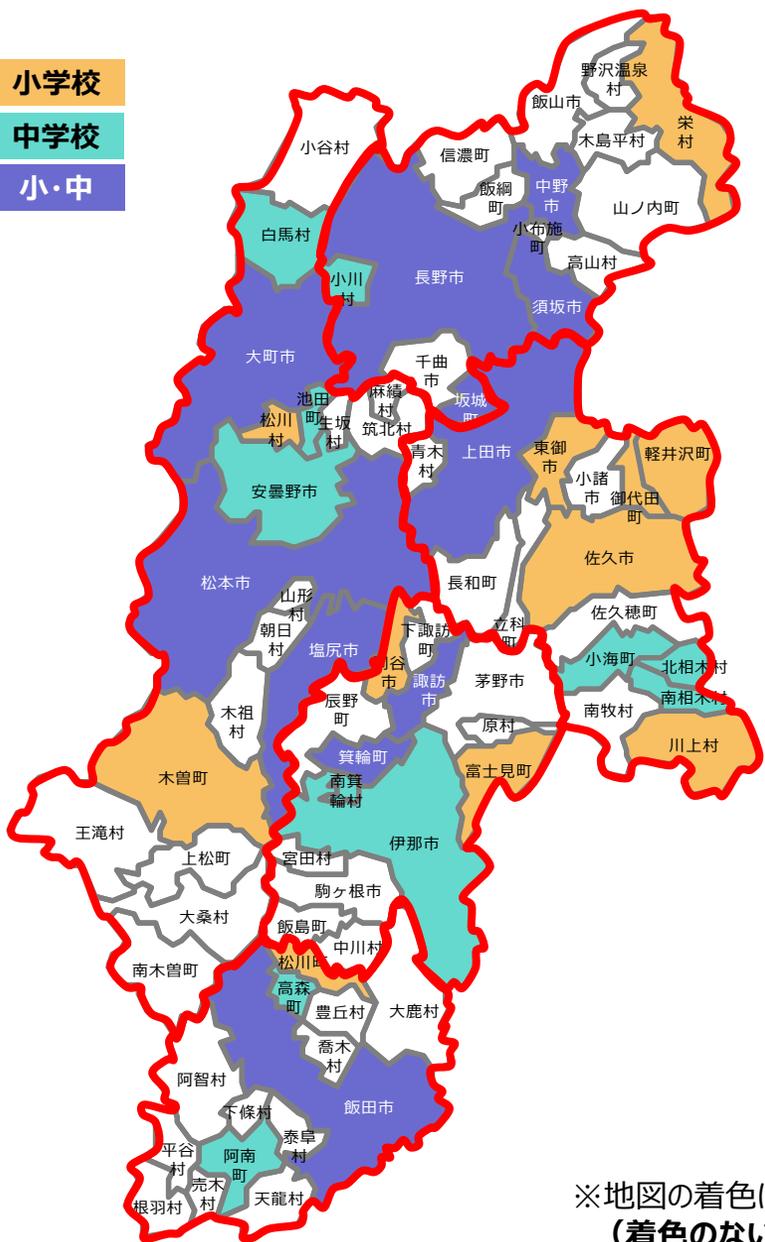
- # 探究を核とした学びの推進
- # 多様な発達特性に応じた学び
- # 自由進度学習、PBL、教科横断的な学び等、新たな学びの手法を効果的に取り入れる
- # 日々の教科の改善

【環境・ツールの最大活用】

- # 山間小規模校にしかできない学びの提供
- # 幼保（やまほいく）と小学校の連携
- # 学校間の遠隔授業の実践
- # 1人1台端末の活用
- # 効果的な活用例を創出・モデル化
- # 地域の文化や産業を教材にした学び

【参考】学びの改革校の取組 (R2~5県一部事業から抜粋)

小学校
中学校
小・中



▼学びの改革パイオニア校構築支援事業 (R5~)

「探究を中核とした学びの推進」 *授業の改革*

- 探究的な学びを進めるためのカリキュラムの開発
- 先進校との連携
- 校種を越えた取組

等

「多様な発達特性に応じた学びをリード」 *子どもへの対応*

- 発達特性を把握するアセスメント研究
- 多様な特性に応じた学び方の研究
- 学びやすい授業環境**

等

学校の改革

「GIGAスクール構想のけん引」 *ツール最大活用*

- 1人1台端末の活用
- 効果的な実践例を創出・モデル化
- 校種や地域を越えた、連携協働

等

「多様な子どもへの学びの保障」 *学校の改革*

- 教室に入りにくい子への支援**
- 学びの保障の実践研究
- 学校以外の学びの場の開発

等

子どもへの対応

▼個別最適な学び研究事業 (R5~)

「個別最適な学び研究」 *授業の改革*

- 単元内自由進度学習の研究と授業実践 (教科別、複数教科同時進行、学習環境の設定、**通知表**)
- 個人追究と共同追究を柔軟に組み合わせた授業デザインの研究
- 生徒が自ら学びを選択する個別最適な学びと複線型授業づくりの研究
- 生徒の願いに寄り添い、生徒と共に学びを創造し、個を伸ばし合う個別最適な学びの実現
- Google Classroomの効果的な活用、学習評価のあり方

▼学びの改革実践校応援事業 (R2~4) ※上記取組の基礎となった取組。以下の分類別で実施

- 学びの仕組みづくり** (**担任制見直し**、**異年齢学習**、**行事の地域連携**、校務精選、PBL、**生徒会**等)
- ICT活用** (遠隔合同授業、活用手法研究) ・ **カリキュラム開発** (**園小連携**、**自己肯定感育成**等)
- 授業改善** (自由進度学習等の手法研究、再任用教員のOJTによる若手教員の教科指導向上等)
- 多様性への対応** (多才な子ども、不登校生徒への学び提供等)
- 山間小規模校** (異学年集団での探究的な学び、地域資源を活用した教材研究や授業参観等)

授業の改革

子どもへの対応

学校の改革

ツール最大活用

※地図の着色は、記載の県事業実績にのみ基づいたものであり、県の他事業及び市町村・学校独自の事業は反映していない。
(着色のない市町村 = 取組みがないという意味ではないことに留意！)

【事務局（案）】③県の支援の在り方

- ✓ 1回目の本会議議論及び市町村教委との対話を通じ、県に求められることは、
「理想像を掲げること（①目指す学校像）」と「プレイヤーが感じる理想と現実のギャップを可能な限り埋めること」
- ✓ プレイヤーが感じる理想と現実のギャップを埋めるための具体的措置としては、以下3点が考えられる
A「まずもって、実践校が円滑に進むための人を付けること」
B「その人が自信を持って取り組めるよう、一緒に考え、勇気づけること」
C「その人以外の“やってみよう”を誘発すること」

※予算要求前のため、確約するものではありません。

③県の 役割

A「人材支援」 予算・人事に関わることなので現時点で確約はできないが、可能な限り配慮したい。
どこに加配をついたらより有効か。
その他関連して、先進地域への視察費用等も手当てできるとよいと考える。

B「伴走支援」 学校の仕組みの変革に当たっては、最大限冒険しつつそれが学習指導要領の範疇内であるかを常に確認しながら、次々と生じる目の前の課題の超え方を一緒に考えるという、高い専門性と当事者意識を持った支援が必要。これを実現するため、外部委託では真似できない高い熱量と、冷静な第三者視点を併せ持った「学校改革支援センター（チーム）」を、県教委内に作ろうと考えている。
このチームで、具体的にどんな支援をしたらよいか。

C「情報整理／発信・コミュニケーション環境の整備」

実践校の取組結果を体系化してまとめ、実践者以外も参照できるようにする。授業公開を支援する。関係者同士が気軽にデジタル上で情報交換できる環境を用意する。等が考えられるが、どうか。（伴走支援チームの取組の一環）

学校改革支援センター（チーム）の支援イメージ

学校改革支援センター（チーム）



教育長



リーダー（庁内）

- チームを統括
- ニーズの掘り起こし
（主幹指導主事と連携）
- アドバイザーと連絡調整
- 必要に応じ学校訪問



エリア担当
（教育事務所）

- 1 指導主事当たり4～5校を担当。
1校につき1回くらいの訪問
- 教科横断的学習、異年齢指導、自由進度
学習、I C Tを活用した学習などを研究
- 教育課程編成に専門的知見



研究担当
（総合教育センター）

- 過去の実践、先進的な実践
などの研究調査及び視察
- 指導主事の学校支援のための
情報源となる
- 必要に応じて指導主事と
学校へ訪問



アドバイザー

- 指導主事の相談を
受け、アドバイス
- チーム会議に出席
- 必要に応じ学校訪問

- ・ 外部人材活用促進
- ・ 「信州やまほいく」の小学校低学年への接続
- ・ 柔軟な教育課程づくり

（新）市町村の
指導主事

（新）ひとり一人の学び実践校
（仮称）の担当教員

（R7から配置を検討）

- ・ 指導主事会議に出席
- ・ 「学校改革支援チーム」と
情報共有

【事務局（案）】④実践校のネーミングの考え方

- ✓ 現状のネーミング「一人ひとりに合った学び実践校（仮称）」は、仮称ではあるとはいえ、**個別最適な学びに寄り過ぎた印象を与えかねない**
- ✓ 今回整理し直した今回の事務局（案）を踏まえ、改めて名前に込めたい思いは、一人ひとりに合った学びを实践するため、**「子どもを主語に」「子どもが選択でき」「こどもの自己実現ができる学校」**
- ✓ **募集時まで決定する**パターンその他、（仮称）のまま募集を進め、**決定後に当該実践校の子どもたちと一緒に考える・投票してもらって決める**という進め方も考えられる。



④ネーミング

現時点での事務局（案）の整理に基づき一旦整理してみましたが、ネーミング案や決め方にアイデアがあれば、ご意見ください。

込めたい思い：個別最適⇔協働的 みたいな話よりも・・・

- ✓未来を見据えた、ポジティブで前向きなイメージ
- ✓学校が楽しく、毎日行きたくなるような雰囲気を伝えるイメージ
- ✓今日の学びが明日へつながる、成長や前進を感じさせるイメージ

- ・未来をつくる学校
- ・明日につながる学校
- ・こどもワクワク学校
- ・こどもファースト学校
- ・信州ポテンシャルマックススクール
- ・みらいつなぐ学校
- ・明日も行きたくなる学校
- ・信州こどもキラキラ楽校
- ・こどものこどもによるこどものための学校
- ・信州型楽校

以上を踏まえ、第2回会議で議論したい点

本資料P8～15：事務局（案）について

前回議論及び直近の動きを基に、実践校の設置（指定）を募集するための事務局（案）について検討したので、率直なご意見をいただきたい。

前回は①目指す学校像を中心にご意見を頂いたが、特に「②進め方～③県の支援」は、前回深掘りできなかったので、活発な議論をお願いしたい。

【参考：第1回資料より】検討会議の検討スケジュール

全3回の会議を通じて、
①理想像 ②進め方 ③県の支援
を行ったり来たりしながら、検討したい。

10月上旬には
募集を開始したい

第1回 本日



最初は①②メイン、

第2回 9/4



徐々に③に意向しつつ、時には①②に戻りながら、

第3回 9/26



①②③を決定



結果まとめ・次回に向けた整理



結果まとめ・次回に向けた整理

E.O.P